



浦賀の歴史ロマンは源氏再興の願い叶神社から



頼朝鎌倉入場の翌年に石清水八幡より勧請

「平家物語」に登場する文覚上人が、源氏の再興を願って房総半島の鹿野山に修行し、養和元年(1181)鹿野山の対岸である西浦賀の地を選び石清水八幡宮を勧請した。やがて源氏の世になり願いが叶ったことにより「叶明神」の称号が与えられた。文覚上人は、北面の武士だったが出家し諸国の霊山で修行、その効験をもって知られていた。後白河法王により伊豆に流された折、頼朝と出会い、源氏の挙兵を勧めたといわれる。

現在の社殿は天保13年(1842)に再建。社殿の彫刻は安房国彫刻師・後藤利兵衛*の作品。

江戸時代 神仏習合のお寺があった

社務所がある辺は江戸時代は不動明王を本尊とした感応院西米寺という古義真言宗のお寺があり、高野山から、南関東一円に配る御札や加持祈禱に使うものが送り届けられ、それを配布する役目をしていました。



(下右) 拝殿の格天井の彫刻は花鳥。当時日本に渡来していない花や鳥も彫られている。(下左) 銅製灯籠は浦賀の遊廊によって寄進。

波の伊八の彫刻、酒井抱一の絵馬に出会える徳川御朱印の寺-東福寺

徳川家康が江戸に入城した折、三浦の代官となった長谷川長綱が曹洞宗に改宗。江戸幕府から御朱印地2石をもらい、浦賀奉行も就任すると必ず仏参した。

本堂には江戸時代中期を代表する画家・酒井抱一が描いた大きな「亀」の絵馬があります。



酒井抱一の絵馬



浦賀水道を望む眺望



観音堂欄干に波の伊八*の龍の彫刻

*江戸末期、後藤利兵衛は石彫りの武田石翁、波の彫刻武志伊八郎と並び「安房の三名工」と呼ばれた。

船改めの奉行所は 幕末海防の荒波に吞まれる

来年開設300周年を迎える浦賀奉行所

奉行所は船改めをはじめ海難救助や地方役所の仕事を行っていた。しかし文化・文政の頃から異国船が日本近海に出没するようになり江戸防備のため、海防の重要な役割を果たすようになる。

享保5年から慶応4年(1868)まで約150年間、奉行2人制の時期もあったが、初代堀尾岐守から土方出雲守まで53人が勤めた。奉行所には、与力10騎・同心50人の役人がいた。

江戸への海運経済を動かしていた船番所

江戸内海への出入りを見張るなど江戸の経済を動かすほどだった。業務は昼夜を通じて行われ、下田と東西浦賀の回船問屋100軒余が実務を担当していたので三方問屋と呼ばれた。



船番所跡

奉行所開設以来いまでも続く渡船

享保5年(1720)に浦賀奉行所が設置された頃から浦賀の東西をつなぐ渡船が通った。

船修復の際には近隣の鴨居、走水、内川新田、久里浜村などにも応分の負担をかけていたので、当時からかなり人々が渡船を利用したものと考えられる。



浦賀奉行所模型(郷土資料館)

幕末浦賀奉行所異国船対応 日米和親条約まで

文政1年(1818)	英国商船	ブラザース号交易要求
文政5年(1822)	英国捕鯨船	サラセン号薪水食要求
天保8年(1837)	米国商船	モリソン号交易要求
弘化2年(1845)	米国捕鯨船	マンハタン号漂流民護送
弘化3年(1846)	米国海軍	ビッドル艦隊通商要求
嘉永2年(1849)	英国測量船	マリナー号江戸湾口測量
嘉永6年(1853)	米国海軍	ペリー艦隊通商条約要求

6月3日浦賀沖に蒸気船サスケハナ、ミシシッピ他帆船2隻停泊。中島三郎助が副奉行と称し対応。
翌4日香山栄左衛門が浦賀奉行と称し対応。
6月9日ペリー一行九里浜に上陸。米大統領親書受取
嘉永7年(1854) 1月14日ペリー艦隊再来航
2月21日までに9隻の艦隊が江戸湾に集結
旗艦船サスケハナ、ミシシッピ、ポーハタン
3月3日横浜村において日米和親条約締結

海運の神を崇める浦賀漁民の信仰-為朝神社

寛政12年(1800)浜町の漁民が海に漂流していた木像を引き上げ、地藏堂に安置し祈願した。その功は多く鎮西八郎為朝の像であったと言われる。文政期(1820年代)の創建で航海及び疱瘡除の神様として信仰を集めている。



按針、雷電、松陰、象山、そして海舟が通った東浦賀



徳田屋敷



三浦稲荷

浦賀の英雄中島三郎助親子が眠る東林寺

浦賀の与力だった中島三郎助は、浦賀が直面した難題を次々に解決し、浦賀奉行に三郎助ありと知られた。明治2年(1869)徳川の最後に幕臣の務めを果たすため親子三人で函館戦争に参戦し、勇猛果敢に戦場に散った。享年49歳、長男恒太郎23歳、次男英次郎19歳。

ペリー来航翌日、松陰と象山は浦賀徳田屋に

浦賀の旅籠徳田屋には、多くの武士や文化人が宿泊した。吉田松陰は佐久間象山やその門下生たちとペリー来航の対応策を協議した。

松陰は翌年ペリーが再航した際、下田でポーハタン号に密航しようとし逮捕投獄される。

三浦稲荷で雷電の相撲興行が行われた

州崎町の稲荷である三浦稲荷の前はさほど広くないが、文化6年(1809)に雷電が右衛門が来て相撲の興行を行ったとされる。浦賀の繁栄ぶりを物語るエピソードである。



東林寺

ひなびた集会所の碑文に家康が夢見た世界貿易の足取りがあった

面影も残らない場所に禁教秘話の歴史がある

会所の裏手、三浦稲荷社の裏から法幢寺にかけて石垣がある。この辺を按針屋敷と呼んでいた。古い記録に「按針の勧請せしと言ふ



洲崎会所

社宮司と言ふ小祠(小さな祠)あり如何なる神を崇めしにや」(地誌『浦賀志録』上巻四(明治42年)とあり、江戸初期に浦賀の町に存在したキリスト教フランシスコ会の教会と思われる。徳川家康が、浦賀を海外貿易の拠点にと三浦按針(ウィリアム・アダムス)に検分させた頃の遺跡と考えられる。



三浦按針

国を護り、海を護る中世から続く海防の歴史

干鰯産業が盛んになる頃、東叶神社より勧請

元禄5年(1692)に浦賀村が東と西に分かれたとき、西浦賀村の叶神社を遷して祀った。明治になるまでは、耀真山永神寺といい古義真言宗醍醐寺派三寶院に属し、横浜の金沢区から三浦半島全域における本山格の修験道の寺だった。

石垣に開いた祠の奥には石の弁才天が祀られている。海難など難事の際に「身代わり弁天」として祈願されていた。社務所の裏に井戸があり、遣米使節の護



衛艦咸臨丸の艦長となった勝海舟が、航海前にこの井戸で水垢離をした後、山頂で断食したと伝えられている。



衛艦咸臨丸の艦長となった勝海舟が、航海前にこの井戸で水垢離をした後、山頂で断食したと伝えられている。

浦賀水道を一望 北条氏の出城だった浦賀城

16世紀後半小田原北条氏分国の頃、伊豆下田の領主が三崎城の出城として水軍の砦・浦賀城を築いた。千葉の里見氏に対する戦略目的(防備)で置かれた三浦半島水軍の根城だった。



浦賀水道 城跡からの眺望

干鰯問屋の隆盛を偲ばせる東耀稲荷

東耀稲荷の格天井や欄間などの彫刻の素晴らしさは東西浦賀の稲荷社の中では随一である。左右隅棟の上には恵比寿と大黒天の飾り瓦が乗り、いかにも商業の街の繁栄ぶりを偲ばれる。

社の一帯は 東浦賀干鰯問屋のリーダーであった湯浅屋*の地所で自ら建てたものと思われる。



東叶神社の前に建てられた「日西墨比貿易港之碑」

浦賀は日西墨比貿易の拠点と考えられた

慶長3年(1598)、家康はスペイン(西)領メキシコ(墨)から新製錬技術を導入するため西領マニラ(比)からメキシコへ向かうスペイン商船(ガレオン船)を浦賀湊に寄港させるよう交渉した。そのため慶長5年来日した三浦按針を顧問とし、江戸邸のほか三浦郡逸見村の知行地と浦賀邸を与えた。三浦按針はマニラにも渡海し浦賀貿易再開のために尽力した。江戸・浦賀・静岡・伏見・大坂にはフランシスコ会修

道院が創設され、洲崎にはスペイン人を保護する高札が立てられた。この浦賀貿易を管轄していたのが船奉行向井将監忠勝である。

浦賀湊には前フィリピン総督ロドリゴ・デ・ビベロや墨国王使節ビスカイノが訪れ、三浦按針建造のブエナ・ベントゥーラ号はロドリゴの帰国のために提供され浦賀を出帆し、幕府船として初めて太平洋航路横断を果たした。ブエナ・ベントゥーラ号模型(伊東市役所)



* 古くは御坊水軍があった紀州の湯浅の出身。一族は海運に秀で京や江戸に出て商いを広げた。